

保護せられたかの一端を述べて見たに過ぎない。
 先生一代の事業は、先生の人格が多面的である様に多方面であるけれども、先生が優秀なる先天の遺傳と賢良なる孟母の家庭教育、並に當時瓦礫に瀕しつゝあつた舊幕の保守的形式主義に對する反動性や、近く明治維新の春を復興せしむべき國民精神の醗酵性や、其他先生を圍繞して居た所有後天的の要素が、相合して遂に明治文化の大立物に捏ち上げて仕舞つたのである。

今日にして活ける先生を見やうと云ふとは到底出來ぬ相談である。今時流行の鎮魂歸神法や降神術は別として、普通の私達には決して出來ぬ注文である。併し先生の活形見とも言ふべき先生の事業中最も精力を罩められた慶應義塾と云ふ一種の家族的學校の學風は即ち先生の人格の客觀化具體化に外ならぬ。
 機慧なる常識——獨立の氣象——現世的道德——融通無碍の方——臨機應變の略——是れ明かに先生の人格の復寫ではないか。

蘇らんとする回教徒

(上)

大川 周明

世界に於ける回教徒の總數は、精確なる統計を不

可能とする事情あるが故に、學者の間に定説がない。其最も少きは一億七千五百萬と推算し、最も多きは約三億と算定して居る。而して是くの如き相違は

主として支那及び蘇州に於ける回教信者の算定が、人によつて甚だしく大小あるに基くものにして、自餘の諸國又は諸地方の信者數に關する統計は、略ぼ大差がない。

支那に於ける回教徒の總數に就ては、歐米の學者皆之を過少に推算する傾向がある。例へば最も精確に近きを以て許さるゝマルティン・ハルトマンは、支那に於ける回教徒數を約二千三百三十三萬二千人と算定して居るが、予の手にし得たる諸種の資料に據つて推算すれば、恐らく三千五百萬を下らぬ。要するに世界に於ける回教徒の總數は、少くも二億五千萬を算するであらう。而して回教分布の大勢を見るに、亞細亞大陸に於ける約一億七千萬を第一とし、阿弗利加大陸これに次いで約六千萬の信者を有し、歐羅巴大陸に於ては土耳其及び歐羅巴露西亞の回教徒約千二百萬を算する。兩米大陸に於ける回教徒は、如上三大陸の移住民に限られ、其の數五萬を出でざ

蘇らんとする回教徒

る可く、濠洲及び太平洋洲に於ては、約二萬の回教徒を算するに過ぎぬ。
 固と回教は、通常の意味に於ける國家的思想を缺如して居る。若し一定の空間的領域が、國家概念の根本要素の一なりとせば、回教は根本的に何等の境界も承認せざるが故に、回教的國家なるものは存在するを得ぬ。即ち全世界は、悉く回教々團の領域であつて、此の領域を獲得するためには、戰爭を必要とする。何となれば非回教徒は、自ら進んで回教に歸依する者を除けば、概ね回教の支配を受くるを肯んぜず、又は其の國土を彼等に捧ぐるを欲せざるが故である。されば一切の非回教的國家團體に對する回教々團の法律的關係は、唯だ一の戰爭であるのみである。此の戰爭は即ち『神聖戰爭 Jihad』であつて、全地を擧げて回教に歸依するまで繼續せらるべきものである。故に回教は、今日に於ても尙ほ世界を分ちて『回教の地』及び『戰爭の地』の二つとなして

「道」第153号(1921.1)

居る。
 斯くの如くにして回教徒は、回教紀元八年教祖ム
 ハムマッドが、全世界に向つて回教の宣言を發
 してより、四方に向つて『神聖戦争』を挑み、回教
 紀元二九六年の全盛時に於ては、回教々團の領域は
 西班牙・摩洛哥・アルジェリー・テュニス・トリポリ・
 埃及・シリア・アラビア・波斯・土耳其斯坦・阿富
 汗斯坦・バルチスタン及び裏海沿岸の諸地方に及
 び、眞に全地を擧げて『回教の地』たらしむるの勢
 ひを示したが、其後回教々團は其の統一を失ひて次
 第に衰退し、現世紀の初頭に至りては、土耳其皇帝
 が僅かに歐亞土耳其及びアラビアの一部に君臨して
 約千六百萬の回教徒を統一せると、波斯皇帝が約九
 百萬の信者を統御せると、阿富汗斯坦及び摩洛哥に
 於て半ば獨立せる教團を組織せる外、大多數の回教
 徒は、悉く異教徒の政治的支配を受くるに至つた。
 而して世界戦に於ける獨塊側の全敗に伴ひ、同盟國

たる土耳其が、非常なる窮境に投ぜらるゝに及んで、
 世界に於ける回教の勢力は、遂に零點下に沈んだ。
 而も之と同時に、回教徒復興の萌が、却つて此の徹
 底せる悲運の裡から現はれ初めた。

二

吾等は、蘇らんとする回教を叙述する前に、先づ
 回教の種々なる特質に就て研究せねばならぬ。而し
 て最初に考察せねばならぬことは、回教に於ては、
 宗教と法律と政治とが、極めて密接に結合されて居
 ることである。

先づ之を政治的に觀察すれば、回教徒が異教徒の
 君主を奉戴することは、回教本来の精神と徹底して
 相容れざる所である。回教は前述の如く、全世界を
 『回教の地』及び『戦争の地』に兩分し、後者は晩か
 れ早かれ前者に化し、究極に於て全地を擧げて悉く
 回教を奉ずべきことを根本の原則とする。現に今日

に於ても『神聖戦争』は一切の『戦争の地』に對して
 之を宣し得るや否やが、回教神學者間の一論點たる
 の事實は、能く回教に於ける信仰と政治との關係を
 示すものである。此の問題に對する多數神學者の解
 釋、殊に印度に於ける回教神學者の解釋は、回教の
 信仰が自由に行はれ、回教徒の規定が遵奉され、且
 回教徒の生命財産が好意を以て保護される地域は之
 を『回教の地』と認め、該地域に於ては『神聖戦争』
 を禁止すべしと言ふに在る。然れども是くの如きは
 明白に事情止むなきに出でたる妥協的解釋である。
 コーランに曰く『アラ」と最後審判とを信ぜざる者
 と戦へ、彼等のうち聖經を有する者が、己れの手を
 もて恭しく贖罪金を捧ぐるまで戦へ』と。茲に『聖
 經を有する者』と云ふは、猶太教徒及び基督教徒を
 指すもので、彼等は天啓の經典を有するものとして
 自餘の多神教徒に對し特別の地位を占め、多神教の
 場合に於ては、若し改宗を拒めば其生命を屠られ婦

人及び幼少年者は奴隸とされたが、猶太教徒及び基
 督教徒は、假令改宗せずとも、定額の租税を回教教
 團の代表者に納め、且此の義務を盡す間は、生命・財
 産・自由を維持することが出来た。されば印度を
 『回教の地』と認むるが如きは、一時の便宜に出たも
 ので、斷じて回教本来の精神でない。故にマクドナ
 ルドの如きも『印度回教徒が神聖戦争の好機を與へら
 れたる場合に於て、尙且此の解釋が有効なりや否や
 は疑問に屬す』と言つて居る。

次に近代國家に在りては、宗教と法律との間に儼
 然たる區別を劃するを原則とする。然るに回教に於
 ては、信仰と法律との間に、何等根本的の區別を置
 かぬ。アブー・バクル・アブデッサラム・イブン・コア
 イブ曰く、『回教徒に取りては、俗人法と宗教法との
 間に區別がない。何となれば兩者等しくコーラン及
 ビムハムマッドの言行を根本典據とするが故である。
 回教徒は兩者を以て當然人智の同一部門に屬するも

のとなし、兩者の間に何等本質的差異を認めぬ。人若し回教徒が、祈禱の儀式と販賣の手續との間に、何等の區別を設けずして、同一態度の下に之を取扱ふ事情を考究せんと欲せば、回教々典を繕いて、容易に此間の消息を知り得るであらう。羅馬法に準據せる歐羅巴諸國の立法が、教俗二法の間に截然たる區別を劃することこそ、却つて回教徒に取りて不可解のことに屬する」と。ムハムマド・ベン・ラハルが『回教の眞理は一切を包有す』と言へるも、亦此の意味に外ならぬ。

かくの如くなるが故に、若し歐洲諸國が、強いて新たるなる法律の下に、其領土に於ける回教徒を律せんとする時は、常に甚だしき反抗を招ぐ。何となれば是れ彼等の固執する信仰を脅かすものなるが故である。されば歐洲諸國にして其植民地に於ける回教徒に對し、或は之を撲滅せんとし、或は之を高壓せんとし、或は之を同化せんと努めたるものは、何れも

牙の發展が、土民の宗教的反抗を挑發した爲に外ならぬ。一五四四年摩洛哥が一獨立國を建設せるも、亦西葡兩國の侵略が、從來族闘を事とせる摩洛哥の諸部族をして、一致協力せしめたる結果であつた。第十九世紀に至り、佛蘭西がアルジェリヤを経略せる時に於ても、アルジェリヤの殆ど總ての部族が、數世紀以來激烈なる族闘を事とせるに拘らず、悉く一致して佛蘭西に抵抗を試みた。一八三〇年、佛蘭西は軍艦七十五隻、兵卒三萬七千五百人を派して、大規模にアルジェリヤを攻略を始めたが、之を全く佛領とする爲には實に四年の長年月を費した。且佛國のアルジェリヤ征服は、之によつて何等直接の壓迫を蒙らざる部族の反抗心をも惹起した爲に、佛蘭西は止むなく其欲せざりし遠隔の地方にまでも兵を出さねばならなかつた。而して其後に於ても、アルジェリヤ回教徒は、不斷に叛亂を起して反抗を持續し、アルジェリヤは佛國陸軍の演習地たるの觀を呈し

失敗に歸して、遂に今日の放任政策を取るに至つたのである。

三

略叙せる事情の下に、回教徒の征服は、歐洲諸國に取りて至難の事業であつた。基督教國が、回教徒多數を占むる領土内に於て試みたる總ての經營は、概ね彼等の敵愾心を激成し、從來彼等の間に存在せし多年の嫉視争闘を忘れて、一致團結の行動に出でしめ、屢々一般的叛亂を惹起しか。

例へば地中海に面する北阿弗利加一帶の地、即ち所謂小阿弗利加は、今日に於て最も有力なる回教の中心にして、適當なる刺戟と指導とを與ふるに於ては、一個堅實なる國家を建設すべしと云ふは、該地方を旅行せる歐米人の等しく承認する所である。而も回教が斯くの如き強固なる地盤を小阿弗利加に確立したのは、第十六世紀に於て、西班牙及び葡萄

た。和蘭政府も、また東印度に於て同様の困難に遭遇した。東印度諸島中、最も激しく和蘭の支配に抗争したのは、南洋回教の中心なる瓜哇回教徒であつた。彼等は異教徒の支配を受くるよりは、寧ろ死するを以て勝れりとし、神聖戦の名に於て頑強なる抵抗を試みた。一八二五年より一八〇三年に亘れる瓜哇戦争は、その最も激烈なるものであつた。瓜哇以外の諸島に於ても、回教徒は固より和蘭の支配を喜ばず、起つて之と戦つた。西スマトラのバドリス戦争、ボルネオのバンジャルマサン戦争及びアットエ戦争の如き、皆な宗教的熱狂、その根柢をなせるもの、其反抗は極めて長く且猛烈を極めた。而して和蘭の權力既に確立せられたる後に於ても、回教徒は之を以て決して恒久的のものとなせず、唯だ抵抗を持續し得ざる爲の一時的讓歩に過ぎずと信じ居る。

此點に關して先年在スマトラ一基督教宣教師の報告は極めて興味ある資料である。曰く「吾等は往々にして全回教世界が、見えざる糸を以て結ばれて居るが如く感ぜざるを得ぬことがある。即ち地球上の或國土に於ける回教内の出來事は、直ちに其影響を各地の回教徒に及ぼさずば止まぬ。例へば先頃のアルメニア人虐殺は、スマトラ回教徒に大なる自負心を鼓吹した。彼等は基督教徒に向つて曰く「汝等今こそスルタンの勢威が如何なる宏大であるかを知り得たらう。スルタンは遠からずスマトラを自由の國たらしめるであらう。其時吾等は今ま土耳其人がアルメニア人に向つて爲せることを、汝等基督教徒に向つて爲すのだ」と。而して此の報道の傳はるや、將に改宗して洗禮を受けやうとして居た若干の回教徒は、基督教に入ることとを斷念した」と。

回教徒は、異教徒の侵入を以て、常に彼等の政治的獨立の脅迫と認むるのみならず、また宗教上の迫

害者として之を憎惡する。故に異教徒の接近が、何等政治的意味を帯びざる時と雖も、之を黙視するとは罪惡なりとするのである。ドッテ曰く「摩洛哥人が歐羅巴人に對して今尚ほ抱きつゝある反感は、政治上より來ると云ふよりは、寧ろ宗教上より來るものである。彼等の敵愾心の由つて來る所は、國民的感情に非ず、宗教的感情である。即ち彼等は其の信仰の維持を以て、絶對的義務と感ぜ、アラブの宗教が外人によつて汚瀆せらるゝことを恐れ且憎むのである」と。

加ふるに回教徒は、その回教を信ずるの故を以て一切の他の人類よりも優越し、神意によつて彼等を主宰するの使命を負ふと信じて居る。蘭領東印度に於ける回教研究の權威スヌーク・ウルグロンジュ教授曰く「回教に歸依せる土民は、其の改宗の年月が數百年の久しきに亘れる者も、或は數年に過ぎざる者も、又衷心より之を奉ずる者も、或は表面だけの

信者に過ぎざる者も、又戒律を守る者も、或は之を等閑に附する者も、又曾て信仰せる偶像崇拜を脱却せる者も、或は未だ全く之を放棄せざる者も、一旦回教に歸依せる以上は、その回教徒たるの故を以て世界に於ける人類中、最も優越せる人民なりと信ずるやうになる。回教の理想は、徹底して信者の精神を把握し、一首長の下に全回教徒を統一するに存する。未だ回教に歸依せざる民族を、改宗・征服・討滅等の手段によつて統一せんとする單純にして矜高なる觀念は、普く回教徒の間に蔓延して居る」と。

斯くの如き信仰は異教徒に對する回教徒の團結を容易ならしめる。故に歐羅巴の一國が、回教徒領域の一點のみに於て企つる行動は、直接利害を感ずる該地點のみならず、全領域に於ける教徒の反抗を激成するに至り、従つて之が平定を困難ならしめる。且異教徒に對する戦争は、回教の宗教的義務であつて、原則としては何人も之を拒むことが出來ぬ。積

極的挑戦の場合、此の義務は日々の祈禱又は斷食の如く嚴格ではないけれど、異教徒側よりする侵略に抗戦するに當つては、此の義務は絶對的のものとなり、婦女子と雖も之を負担するを原則とする。これ歐州政治家が、回教徒の反抗を激成して神聖戰を惹起せざらんが爲に、彼等に對して妥協的政策を取るに至つた所以である。ギョー曰く「神聖戰は、阿弗利加北部の歐州植民地に對する一個の脅威であつて、之を蔑視し又は輕視するは、極めて無謀のことと言はねばならぬ」と。

四

回教徒の征服は如上の至難なる事情あるに拘はらず、歐州諸國は次第に彼等を壓倒して其支配權を確立し、世界に於ける全回教徒の三分の二は、歐州諸國に隸屬し、又は其の保護の下に立つに至つた。而して侵入の初期に於ては、各國専ら武力を以て之を

威壓するに努め、一旦之を征服してよりは、主として同化政策を採つて来たが、此事却つて回教徒の政治的並に宗教的反抗を挑發し、不斷の叛亂を惹起するに至つたので、後には彼等に許すに信仰の自由を以てし、其の風俗習慣を維持せしめ、彼等の自負心を利用して之を懐柔するの策に出でた。

斯くの如き懐柔政策の典型的なるは、アルジェリ及びビテュニスに於ける佛蘭西の統治であつて、雷に回教徒の信仰に干渉せざるのみならず、其の風習を尊重し、彼等と交るに對等の禮を以てして、人才を彼等の間より登用して要路の官吏に任じ、且彼等を擧げて植民地軍隊を組織し、邊境の防備に當らしめて居る。

埃及に於ける英國統治も、初めは回教の基督教化を企て、成らず、次で宗教問題に對して全然没交渉の態度に出で、後には回教徒の歡心を得なければ植民的發展を困難とするより、積極的に彼等に向つて

好意を表明するに至つた。下に引用する在埃及基督教宣教師の不平は、埃及に於ける英國政府の對回教政策を示すものである。曰く『政府は、回教徒の利益に對して特別なる好意を表し、且基督教を犠牲にしてまでも回教の迷信に不當なる敬意を拂はんとする。裁判所が回教の律法に從つて日曜を休日とせず。金曜に閉ぢたるが如き、又はメッカ巡禮のカラワシが國王の身代りなる駕籠を奉じてカイロを着發するに當りて、英國軍隊及び土民軍隊が之を送迎するが如き、皆な甚だしく基督教を無視する行動である。殊にカルトゥムに建設されたゴルドン將軍記念學校に於ては、教科書としてコーランを用ゐ、絶えて基督教聖書を用ゐず、且金曜を以て休日とする』と。

而して西部アフリカに於ても、回教徒多數を占むる地方に於ては、英國政府は埃及に於けると同一の政策を採り、或は官費を以て回教會堂を修築し、回教徒の會合に金品を寄附し、軍隊に入營する偶像教

徒には、回教の規定に從つて之に割禮を施すなど、専ら彼等の敵愾心を慰撫するに努めて来た。かくて回教徒は一面に於て白人の壓迫に抵抗して起つべき充分なる勢力を缺き、他面に於て歐洲諸國は好意を回教に表するの態度を取るに至つた爲、少くも表面は異教徒の支配を認容して来た。加ふるに回教徒は悉く何れかの宗教的講社に屬し、講社の首長は講中に對して絶對の權威を有して居る。故に歐洲の統治者は、常に教徒中の敬虔なる修行者及び諸講社の首長に對して其の甘心を買ふに努め、彼等の生活の安全を保障し、彼等が布施又は供物の名目を以て講中より金品を徵集することを許容し、之によつて最も有効に平和を維持して来た。蓋し此等の首長並に修行者は、平和なる状態に於て利益を享受しつゝあるが故に、勝算なき叛亂によつて、却つて自己及び信者に不利を招ぐが如き愚を避けて居たのである。

かくの如く一旦征服せられたる回教徒は、適當なる手段を以てすれば、之を支配すること却つて他の人民りよも容易なるが如く見えるけれど、而も彼等の服従は、決して衷心より出でたるものでないことを知らねばならぬ。即ち各宗教的講社及び其の首長の勢力を利用し得る間は統治甚だ容易であるけれど、彼等の忠實は決して絶對的に信賴し得る性質のものでない。故に曾て佛蘭西の内相たりシアントーは、佛領蘇丹及びアルジェリに於ける回教徒の危険性に就て國民に警告して曰く『屢々撃破せられ而も決して阻喪することなき此等の被征服者は、表面平穩を装へども、實は不斷に危険なる不平の焰を心裡に燃やして居る。回教の諸講社は、今は適當なる指導者を缺くが故に、暫く無事ではあるけれど、他日の叛亂に備ふる彼等の精神的爆發薬は鄭重に保存せられて居る』と。而してモランの如きも『回教徒の領土に在りては、暴動及び叛亂の門戸は常に開放

されて居る』と憂慮して居る。

五

此等の憂慮乃至警告は決して杞憂でない、歐洲諸國が歐羅巴文明又は基督教文明を回教徒の間に扶植することは到底不可能事と見て宜しい。それはアルジェリに於ける佛蘭西の失敗が有力に裏書する。佛蘭西政府の熱心なる同化主義を以てして、アルジェリイの回教徒は、今尚ほ佛蘭西文明と風する馬牛である。彼等は多年佛蘭西文明と接觸し來れるに拘はらず、回教の信仰及び法律に對する愛着心は、依然として舊の如く、その風俗習慣、家族制度乃至生活状態に於て、何等の變化を見ない。佛蘭西憲法は士民の游牧生活を向上せしむるため大いに盡力した。植民地政府は、特に家屋を建て、村落を作り、茲に士民を定住せしめんと企てたが、其等の計畫は皆な失敗に終つた。蓋し彼等は家屋内に蟄居するよりは、自

由なる天幕生活を愛する。官吏に採用せられて、多年佛蘭西官吏と同様の生活を送れる士民官吏すら、一旦退職すれば、年來の文明的生活を一擲し去つて、再び天幕生活に復歸するものが多い。されば回教徒の基督教化の如きは、殆ど絶望である。カストリイは『回教國土内に於て基督教宣教師が、回教徒に對して採るべき行動は、唯だ一事あるのみだ。即ち彼等をして回教徒たらしめて置くことがそれだ』と言つて居る。彼れの言は正しい。回教徒は、回教を以て基督教よりも高等優越なる宗教と信ずるが故に、何を好んで改宗する道理がない。且彼等の歐洲國民と接觸するや、其の缺點のみを觀し、その基督教文明を觀察するや、主として之に伴ふ罪惡を見る。故に彼等は益々回教の優越に關する確信を強くする。かくの如くにして歐洲の教育を受け、多く基督教に就て學びたる者が、却つて益々之を非難し且敵視するに至るのである。ドッテ曰く『最も教養ある回教徒 最も吾人と遠かる』と。

時感

(十二月十一日稿)

海外 足堂

今のところ別に之れと云ふほどの出来事は起つて居らぬ。前號に論じた如く、國際聯盟會は滑稽極るものであるから、再び論ずる價値はない。大見物は露西亞であるが、今日のところ、之れも別に變つたとはない。

支那はいつもごた／＼して居るが、兎に角本氣でない人の行つて居るとであるから、餘り其出来事に、注意を拂はぬ、先づ一言でいへば、結局は日本と提携して一大新文明を我東洋より起すか、さも

時感

なくば英米を謀るつもりで、英米に謀られ、終に吞まれて仕舞ふのであらふ。愛蘭問題は、只だ可愛さふに思はずばかり。同じ白人同士でも、一寸人種が違ひ、宗教が違ふと、あんなに虐るものか、彼の口に自由を論じ、平等を論じ、同胞を論ずる英國にして此くの如きかと、義憤胸を突くばかりである。加奈陀の一議員が、聯盟會に於て大氣焔を擧げたとして、委員連中が驚愕したと云ふとであるが、ナニニ加奈陀も、英國の尻に附着て居るから、そんな事も云へるので、つまり虎と狐だ。日本の石井君が聯盟會に人種平同案を再提出すると云ふので、濠洲の委員が退會を賭して争ふと嚇したさふだが、ナニ生意氣な、石井君

始め其他我が委員たるものは、通過しやうが通過しまいが、採用しやうが採用しまいが、そんな事には頓着せず、正々堂々侃々諤々と、ロイドジョージやブルジョアを睨みつけて、云ふべき丈の事は云はねばならぬ。一番に失敬な不埒な奴は米國である、今日世界の平和を亂すものは、露でなく、獨でなく、佛でなく、伊でなく、英でなく、全く米國の一國ばかりである。何の事だ、眞先きに世界に永久平和あらしめよと叫んだ大統領を戴く米國が、口に、筆に、行爲に於て、日本を侮辱し、日本を土足にかけ、日本に向ふて喧嘩を賣り、日本が何處までも平和の心を持し、平和の手段を以て之れに對して居るのに、又々今度新に全海軍を大平洋に廻して